広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	INEI 加盟大学と連携した授業研究・平和教育セミナー（３）：平和教育者アーカイブの構築
Author(s)	草原，和博；小山，正孝；川口，広美；金，鍾成；川口，隆行；間瀬，茂夫；岩田，昌太郎；丸山，恭司；吉田，成章；桑山，尚司
Citation	広島大学教育学部共同研究プロジェクト報告書 , 20 : 43 - 52
Issue Date	2022-03-18
DOI	
Self DOI	10.15027/52072
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052072
Right	
Relation	

INEI 加盟大学と連携した授業研究・平和教育セミナー（３）

－平和教育者アーカイブの構築－

研究代表者　草原　和博（社会系コース）
研究分担者　小山　正孝（数理系コース）
川口　広美（社会系コース）
金　　鍾成（社会系コース）
川口　隆行（国語文化系コース）
間瀬　茂夫（国語文化系コース）
岩田昌太郎（健康スポーツ系コース）
丸山　恭司（教育学系コース）
吉田　成章（教育学系コース）
桑山　尚司（グローバル教育コース）
研究協力者　大坂　　遊（教育ヴィジョン研究センター）
小松真理子（総合科学研究科・博士課程後期）
吉田純太郎（教育ヴィジョン研究センター）

Ⅰ　プロジェクトの背景と目的

１．PELSTE2022

本プロジェクトは, 本学教育学部が 2019 年に加盟した International Network of Educational Institutes（INEI）との連携を実質化するために，教育ヴィジョン研究センター（EVRI）として, 冬季の特別交流プログラム : Peace Education and Lesson Study for Teacher Educators（以下 PELSTE と称する）を企画・実践することを目的とする。本プログラムの成果に基づいて，研究者の国際的なネットワーク化及び国際共著論文の執筆につなげることを最終的な目的とする。

広島大学教育学部が，①日本の代表加盟大学として，また②ヒロシマに拠点を置く大学として INEI にどのような貢献ができるかを精査したところ,「平和教育」と「授業研究」の２テーマでイニチアチブが発揮できるとの結論に達した。第１回の PELSTE2020 では, INEI 加盟大学より５名の研究者を招聘し，両テーマについてフィールドワークと研究交流を実施した。しかし，第２回の PELSTE2021 以降，Covid-19 の感染拡大に伴い，海外からの招聘は実現していない。PELSTE2021 では両テーマについてオンラインでシンポジウムを開催することができた。第３回の PELSTE2022 も引き続きオンラインでシンポジウムを開催することになったが，今年度はとくに「授業研究」に焦点を当てて，過去の PELSTE 参加者の活動のフォローアップに傾注することとした。具体的には，Localizing Lesson Study: The Cases of America, Brazil and India と題し，パンデミックの制約にある各地域文脈下でどのような授業研究の仕組みが構築されてきたかを協議することとした。本シンポジウムの成果の詳細は,「令和３年度広島大学教育学部共同研究プロジェクト「授業研究を軸にした教師教育に関する国際共同研究のプラットフォームづくり（２）」（研究代表者：金鍾成）」の報告に譲る。

本稿では，PELSTE2022 のシンポジウムの準備に並行して進めた「平和教育」の取組を中心に報告を行う。

２.「ヒロシマの平和教育者」アーカイブ構想

PELSTE2021 から取り組んでいるのが,「ヒロシマの平和教育者」に対するインタビュー動画の作成と，そのアーカイブづくりである。直接的には，オンラインで PELSTE2021 を開催するために，参加者向けに提供した事前学習教材を起源とする。詳細は草原・松宮・三好他（2021）に詳しい。

その後，EVRI 主催のセミナーで，アーカイブ構築の意義をめぐって協議する機会を得た（EVRI，2021）。本セミナーを契機に開発者相互で対話を深めることができ，PELSTE 参加者向けの教材提供は継続しながらも，アーカイブそれ自体は独立プロジェクトとして推進・充実していく必要性が確認された。当面は以下の目的でアーカイブの構築をはかることとし，３か年で 10 名の平和教育者にインタビューすることを目標とした。

① 国際関係やその時々の国家の制度・政策に，または地域社会の課題や矛盾に向きあい，多様な立場に基づいて平和教育を実践してきた教師の主体性（agency）を，それぞれのライフヒストリーから描き出すこと。

② ①の記録を蓄積することで，ヒロシマの戦後教育史を多面的・多層的に捉える基礎的なデータベースを構築すること。ヒロシマと世界の平和教育の理念と実践を比較研究し，個別性と普遍性を究明する手掛かりを提供すること。

③ ①の記録を教師教育に役立てること。教員志望者には，平和教育者の実践の意味や限界を歴史的な文脈から理解したり，自己の実践への示唆を読み解いたりする機会を与えること。将来的には教員志望者にもアーカイブづくりの経験を与え，平和教育を歴史化・記憶化する視点を省察させること。

以下，2021 年度は，平和教育者の聞き取りをどのように実施したか（Ⅱ），聞き取り結果をどのような視点から動画編集したか（Ⅲ），編集された動画に対して，２名の専門家はどのような解説を提示したか（Ⅳ），平和教育者の語りと専門家の解説をいかにアーカイブ化したか（Ⅴ）を記述し，今後の本プロジェクトの展望（Ⅵ）を示したい。

（草原和博*）

Ⅱ　対象者の選定と聞き取りの視点

１．対象者の選定

今年度インタビューを試みるにあたっては，学校種の多様性に注意し，また前年度対象者の専門分野や世代が重ならないことを念頭に，対象者の選定を進めた。前年度は高等学校・国語科（書道）の元教諭（90 歳代），中・高等学校の社会科（地理）の元教諭（70 歳代），そして小学校教育を専門にする現職教諭（20 歳代）らに話を聞いた。それを受けて，本年度は，表１のとおり３名を選定した。

昨年度の反省より，ジェンダーバランスに留意した人選としたかったが，撮影スケジュールの都合と先方の予定の折り合いがつかず，断念せざるを得なかった。来年度の課題としたい。また，被爆者の元中学教諭にもお話を伺い，撮影依頼をしていたが，ご体調を鑑みて今年度の撮影は見送ることとした。被爆一世ならではの平和教育に関わった情熱を，

本アーカイブに記録していくことは重要と考える。来年度は，時間的限界が差し迫ることも意識しながら，引き続き人選を進めることとなる。

表１「ヒロシマの平和教育者へのインタビュー」への協力者（インタビュー順）

氏名	松井 久治	梶矢 文昭	橋本 一貫
年齢	60 歳代	80 歳代	60 歳代
出身地	広島市	広島市	広島市
勤務年数	35 年以上	教諭として 25 年以上 校長として 5 年 広島市教委にも 10 年弱勤務	中学校教諭として 15 年以上 高校教諭として 20 年以上
学校種	中学校 （広島市立）	小学校 （広島市立・国立大学附属）	中学校及び高等学校 （広島市立）
専門	数学科	初等教育 （大学では国語教育を専攻）	美術科
主な平和教育への関与	○「空白の学籍簿」「20 万人の顔」「ねがい」等の先駆的な平和教育実践を牽引 ○平和教育研究所研究員として「『平和教育のとりくみ』実態調査」を実施 ○退職後，DVD『広島の先生の物語』を制作	○大学時代に「突然訪れる死」を題材にした童話を執筆 ○市教委にも出向 ○市立校にて管理職も ○退職後の被爆証言活動 ○退職後に「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を設立	○中学生を対象にドキュメンタリー番組を用いた太平洋戦争史を指導 ○高校美術コース選択者を対象に「平和」のイメージを描かせる ○「次世代と描く原爆の絵」事業に参画，高校美術部の部員に絵画指導

（川口（隆）・小松のメモをもとに吉田（純）作成）

２．聞き取りの視点

インタビューにあたっては，昨年度同様，以下の５つの質問項目を共通に用いた。

・あなたが教職を目指したきっかけをお聞かせください。
・あなたは教師として「平和」「広島」をどのように教えてきましたか。
・「平和」「広島」を教える上で特に大事にしてきたこと（ねらい）と，それを教える上での困難や励みを教えてください。
・ご自身の視点から見て，「広島の平和教育」とは何だったのでしょうか。
・世界の教育者に向けてメッセージをお願いいたします。

聞き取りにあたっては，以下の２段階の手順を踏んだ。第１に撮影前の事前調査である。公開資料を収集するとともに，教職キャリアを通じた平和教育への取り組みについて対象者から直接聴取した。主に小松が担当した。第２に撮影本番である。対象者を再度訪問し，上の５つの質問に沿って平和教育への取り組みを語っていただいた。動画編集者の求めに応じて，語りの内容に関わる資料・記事や写真等も提供いただいた。主に小松，川口（隆），吉田の３名で担当した。なお，橋本先生については，2020 年 12 月の EVRI セミナーで実践を発表いただいたこと，また PELSTE2020 に際して「次世代と描く原爆の絵」の実践を見学したことを踏まえ，事前調査を略した。対象者の先生方には，これらの調査に快く時間を割いてくださったことに重ねて御礼を申し上げたい。（小松真理子*）

Ⅲ　動画編集のプロセスと視点

１．動画編集のプロセス

筆者は，以下に示す５つの段階を経てアーカイブ動画を編集した。

① 動画素材データの収集。小松・川口の聞き取りに筆者も同行して，３名の平和教育者の語りをビデオカメラで記録した。インタビュー終了直後には，語り手から提供を受けた資料（若き日の写真，平和教育実践のために描いた絵画作品等）を写真に収めた。以上に加えて，動画にインサートすべき資料があれば博物館・図書館等から後日収集した。

② 動画内容の構想。インタビューの撮影中に見聞きした平和教育者の語りや，それに対する小松・川口の応答を手がかりにして，素材データの選定・配列を検討した。

③ 動画の編集。構想したプロットを基にして動画を作成した。具体的には，（１）約 30 分の長さになるよう語りをカット・結合する，（２）語りの内容に適した見出しを動画右上に記述する，（３）必要に応じて資料画像や解説テロップを挿入するといった作業を行った。

④ 関係者による動画の確認。聞き手の小松・川口，研究代表者の草原が暫定版の動画を視聴して各人が修正意見を出した。それを基にして筆者は動画の改善を図った。

⑤ 動画の仕上げ。最後に，学生有志の協力を得て，音声・映像・テロップの軽微な不備を修正したり，日本語・英語字幕を挿入したりして動画を完成させた。

ただし，①から⑤までは単線的・一方向的に進行したわけではない。３名の動画編集は同時並行で進んだため，実際の編集過程は上に示すよりも複雑であった。

２．動画編集の視点

上述の作業のうち一番の難所は，③（１）の語りの継ぎ接ぎであった。数時間のインタビューを約 30 分の動画として再構成することは決して容易なことではない。では，筆者はどのように語りを取捨選択し，繋いでいったのか。動画編集における筆者の視点を３つ報告する。

第一に，逸話性である。単に５つの質問に対する回答だけで動画を構成すればよいというわけではない。国外・次世代の平和教育者が，インタビュイーの教育観・平和観を理解するには，動画を通じて３名の平和教育実践を追体験する必要があると考えられる。そこで，動画には指導に係るエピソードを積極的に盛り込んだ。例えば，橋本氏の動画では，「原爆の絵」作成を嘆願する芸術家肌の生徒に対して説教した話を挿入している。これにより，「原爆の絵」をアート作品として捉えるべきではないとする橋本氏の思いを，視聴者は十分に汲み取ることができるだろう。

第二に，連続性である。エピソードをただ寄せ集めればよいというわけではない。筆者の使命は，映像を以て平和教育者の語りを１本のライフヒストリーとして表現することである。まして視聴者が飽くことなく長時間の動画を視聴するためには，独立した様々な経験談を自然に繋ぐことが極めて重要であった。例えば，松井氏の動画では，研究会や異動の話題を織り交ぜることによって，翠町･観音中学校での各実践談を違和感なく接続した。

第三に，再現性である。面白く見ごたえのある動画さえできればよいというわけではない。カット・結合を繰り返すうちに，インタビュイーの語りが歪められることなどあってはならない。一般的な質的研究と同様に，得られた語りを適切に要約することが編集の大前提であった。

（吉田純太郎*）

Ⅳ　解説動画の意図と内容

本章では，インタビュー動画に対して追加される解説動画のコンテンツを紹介する。解説動画は，昨年に続いて教育哲学を専門とする丸山恭司と原爆文学を専門とする川口隆行が担当することとなった。

１．丸山恭司

「広島の平和教育は原爆の被害を知ることに偏っていないか。」平和教育に関心のある海外の研究者からしばしばこのように指摘されてきた。広島の平和教育者のインタビュー動画をご覧になられた方のなかにも同じような感想を持たれた方がいるかもしれない。

確かに平和教育の国際標準から考えれば，広島の平和教育に偏りのあることは否めない。平和教育によって一般的に目指されているのは，暴力の文化を克服するための行動が取れるように教育することである。地域紛争（さらには友人間の争いや差別などの社会的不正義）を調停し平和な社会を構築していくことのできる人を育てることが現在の国際標準的な平和教育理解であろう。

一方，広島の平和教育は何より被爆の実相を国内外に，そして，後世に伝えることを主眼にしてきた。そのため，平和な社会の構築をその先に見据えた究極的目的としながらも，直接的な目標には設定せず，教材として取り上げるのも原爆被害である。平和教育によって原爆の非人道性を知らしめ，その非人道的行為を可能とした歴史的政治的経緯を学んでもらうことで，核兵器を使用しない平和な社会の実現が可能となると考えるのである。

以下では，広島の平和教育がなぜそのような特性を持つようになったのかを解説する。そして，教師の語りをライフヒストリーと捉えることで見えてくる広島の平和教育の更なる特性を指摘する。

平和のための検閲：原爆の被害は検閲のために人々に知られるところとならず，いまだその影響は消えていない。

原爆投下直後は，国民が戦意を喪失することを恐れた日本政府によって報道規制がかけられ，原爆の重大な被害は軽微なものとしてしか報道されなかった。終戦後も，GHQ は原爆の被害に関わる報道を厳しく制限し，検閲によってコントロールしようとした。検閲は日本に民主主義を根付かせ秩序を維持することを目的に，GHQ 批判や軍国主義擁護の言説を取り締まるために主に出版物を対象に行われ，一般市民には公表されてはいなかった（後に私信なども取り締まりの対象とされた）。米国政府にとって，原爆投下は日本が自ら招いた戦禍として，また，戦争の早期終結により兵士のみならず日本国民の多数の命を救った正しい所業として理解されるべきものであった。原爆投下の非人道性の指摘につながるいかなる出版物（報道であれ，文学作品であれ，医学論文であれ）も，投下の正当性を疑いうるものとして禁止されねばならなかったのである。

これらの検閲により，原爆被害の実際は，国内外の人々に正しく知らされなかった。原爆は一般市民を無差別に死傷させた点で他の都市空爆と共通し，一つの爆弾によって甚大な被害が一瞬のうちにもたらされた点に違いがあると理解された。その結果，被爆地の不条理は放っておかれることになる。被爆者自身が知識もないまま熱線によるケロイドや放射線による健康被害に苦しみ，二次被害として，周りの人々の無知による就職・結婚に関わる差別や貧困に苦しみ続けた。今も広島の人々には，原爆によって何がもたらされたの

かが国内外に十分に知られていないとの強い想いがある。核兵器の開発競争が今なお続いている現実は，その非人道性がいまだに理解されていないことの証左なのである。

削除・発禁処分の対象とならないよう，いわば戦略的な自己検閲として，「原爆」という言葉の代わりに「平和」や「平和記念」という言葉が使われるようになる。広島の「平和教育」の含意は「原爆教育」なのである。検閲時代に醸成され今なお続く原爆に関する無理解を是正するために，広島の平和教育は原爆教育として，被爆の実相を国内外そして後世に伝えようとしているのである。

検閲制度は 1948 年には事前検閲から事後検閲に変更され，1949 年には廃止される。しかし，検閲によって人々の間にもたらされた原爆に関する偏った理解は，内面化され無意識化された自己検閲メンタリティとともに残り続けている。広島には「原爆」と「平和」の複雑な読み替えコードもまた残り続けており，時に自覚の下に，時に自覚のないまま読み替えコードが運用されているのである。

平和教育者の証言をライフヒストリーとして再構成する：ライフヒストリー法は社会科学の質的研究手法の一つである。その定義は研究者によって異なるが概ね次のように言うことができよう。当事者が語る「自分史」を一次資料とし，研究者がそれを様々な資料を用いて社会的文脈と連動させて再構成したものがライフヒストリーである。ライフヒストリーは個人の独自性を損なうことなく，社会変化への個々人の応答から変動を読み解くことを可能にしてくれる。

平和教育者の証言をライフヒストリーとして再構成するとき，どのような論点が見えてくるだろうか。冷戦等の世界情勢，日本の政治体制，教育行政と教職員組合の関係の変遷，地域住民との関係の中で，広島の教員が平和教育をいかに実践してきたのかを読み解くとき，三層に構造化された特徴を認めることができる。すなわち，第一層では，原爆教育として被爆の実相を伝えることを使命とする初期の関心が維持され，第二層では，反戦教育としてアジアにおける加害責任と連動させて戦争について考え，第三層では，構造的暴力の排除をも視野に入れた平和構築教育として私たちの身の回りの争いや暴力から国家レベルの争いや暴力までを対象に調停の仕方を考え，貧困や格差をいかになくすことができるかを議論する三層構造である。戦後の社会変化にともない層が加えられ，教員それぞれに層の厚さは異なるけれども，広島の平和教育は第一層を基盤としていることに変わりはないのである。

（丸山恭司*）

２．川口隆行

上述三人の教育実践の意義を考えるために，広島の平和教育の歴史背景を整理した。広島の平和教育運動は，１）広島県原爆被爆教師の会（被爆教師の会）や教職員組合が主導した 1970 年代から 90 年前後まで，２）広島市教育委員会や広島県教育委員会が主導した 90 年代後半から現在まで，と大別できるだろう。

1960 年代後半，文部省の教育政策に対して，日本教職員組合を中心にした教師による教育課程の自主編成運動が行われた。広島では，学校で被爆体験が十分に教えられていないことに危機感を覚えた教師たちが，1969 年に広島県原爆被爆教師の会（被爆教師の会）を結成，会長に広島県教職員組合副委員長の石田明が就任した。被爆教師の会は教職員組合

と連携し，原爆・被爆を原点とする平和教育に取り組む。1972 年には，のちに松井久治先生が関わる広島平和教育研究所が被爆教師の会と教職員組合を母体として設立された。広島平和教育研究所は，教材研究や教材開発を推進することで，広島のみならず全国の平和教育の普及に大きな役割を果たす。

1980 年代に入ると欧米や日本における反核運動の機運を背景にして，平和教育が全国で盛んになる。広島・長崎への修学旅行の動きが定着し，松井先生が話された「空白の学籍簿」や「20 万人の顔」の取り組みが，広く注目されたのもこの時期に当たる。原爆・被爆を原点とする広島の平和教育であったが，被爆の惨状を教えることに拘りながらも，原爆や戦争についての歴史的背景や倫理的・社会的責任にも関心が払われた。松井先生や中学校教師時代の橋本一貫先生の取り組みにもその一端が示されている。またそれぞれの地域社会の課題に関わり，場合によっては保護者や地域の人たちとの連携しながら，生徒の身近な問題と平和学習をつなげ，手探りで実践される姿勢が印象的でもある。

俗に「平和教育の広島市／人権教育の福山市」という言い方がある。背景として県西部では原爆が，県東部では同和問題が地域の歴史や社会を語る上で重要な課題であったためである。ただし，松井先生と橋本先生も同和教育に触れているように，原爆や核兵器を話題の中心とする平和教育と同和教育とはズレと重なりを孕みながら展開された。これはこの時代の固有の問題であると同時に，現在においても平和教育の理念や内容，方法を考えるうえでも学ぶべき点がある。

一方，80 年代以降，広島の平和教育を牽引してきた被爆教職員の退職，引退という新たな問題が生まれていた。組織の中心を担ってきた人々の減少は，平和教育の在り方にも大きく影響を与えたと思われる。また，梶矢文昭先生の話に伺えるように，被爆教師の会や教職員組合主導の平和教育に抵抗感を覚える人も存在した。1990 年代に入ると被爆教師の会の母体でもあり，連携してきた教職員組合の分裂という事態がおこる。1989 年，日本教職員組合から共産党系の全日本教職員組合（全教）が分離，広島県教職員組合も広島県教組と全広島県教職員組合に分裂する。平和教育を主導してきた組合の弱体化という事態に加え，1998 年には，文部省が広島県教育委員会と福山市教育委員会に対して教育内容と学校管理運営について是正指導を行っている。是正指導については，学校の教育活動及び管理運営において，政治的な中立性が確保されていなかったためと説明されるが，結果的には平和教育を牽引してきた教職員組合の混乱を招くことにもなった。

いずれにせよ，被爆教師の会の運動が停滞し，その基盤をなしていた広島県教職員組合が分裂した 1990 年代以降，教育行政や平和行政が平和教育を主導しようと動き始める。1995 年，広島市教育委員会は「子どもピースサミット」や「平和に関する意識実態調査」を開始する。「子どもピースサミット」は，梶矢先生が話題とした平和記念式典で子ども代表による「平和への誓い」につながる活動であり，「平和に関する意識実態調査」は，広島平和教育研究所が行なっていた事業を引き継ぐ性格を備えていた。管理職を務めた梶矢先生が学校退職後に立ち上げる「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」の発足もこの時期である。さらに広島市教育委員会は，2011 年度に新たに「平和教育プログラム」を策定，小学校から高等学校までを３カ年ごとに区切って，それぞれの過程に応じた平和教育教材を作成している。2007 年から橋本先生の取り組まれた基町高校における「原爆の絵」の活動は，平和記念資料館との連携事業であるが，行政との連携という点においても，次世代への被爆

体験の継承という点からも，この時期の動きの一つとして大きく位置づけることができよう。ただし，一方的な体験の伝達に留まらない，被爆者と生徒の協働作業とも呼ぶべき「原爆の絵」の活動は，継承とはそもそもどのような行為なのかといったことを反省的に捉えかえす意義をもっている。

最後に加えて言うならば，90 年代におこった組合から行政へという，平和教育を主導してきたアクターの交代については，教職員組合，教育委員会，被爆教師の会といった三者の立場を整理したうえでの議論が必要であろう。前の時代の平和教育実践に存在した可能性や問題点の何がどう引き継がれたのか，あるいは引き継がれなかったのか。このようなことを考えることは，今後の平和教育を構想するうえでも重要な意味をもつだろう。

（川口隆行*）

Ⅴ　アーカイブ・ホームページの構想

「ヒロシマの平和教育者」アーカイブは，EVRI の運営するウェブサイト内に構築し，2022 年 1 月中旬に暫定公開した（https://evri.hiroshima-u.ac.jp/archive-of-hiroshima-peace-educators）。作成にあたっては，プロジェクト関係者と協議を行ったほか，NHK の被爆証言者ライブラリー（https://www.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/no-more-hibakusha/library/shogen/），ルワンダ虐殺関係者の証言記録（https://genocidearchiverwanda.org.rw/index.php/Category:Testimonies），ホロコースト生存者の証言記録（https://www.ushmm.org/remember/holocaust-reflections-testimonies）など，本プロジェクトの趣旨と類似するウェブアーカイブを参考にデザインの検討を行った。

アーカイブページは，右のとおり，①トップ画像，②趣旨説明，③平和教育者に対するインタビュー動画と専門家の解説動画（YouTube の埋め込み機能を利用），④問い合わせ先，の大きく 4 つのパートで構成されている。③については，本稿執筆時点では 2020 年度に制作した動画計 5 本（3 名の聞き取り＋2 名の解説）を公開しているのみだが，3 月末までには 2021 年度に制作した動画をさらに 5 本（3 名の聞き取り＋2 名の解説）追加予定である。

本アーカイブページのデザインにあたっては，以下のような点に配慮・工夫した。

第 1 に，PC だけでなくスマートフォンやタブレット端末でも問題なく参照できるレスポンシブなデザインを採用した点である。EVRI の既存のページが PC 以外のデバイスからのアクセスが多いことに鑑み，本アーカイブも多様なデバイスでの利用を可能とした。

第２に，すでに EVRI がアップロードしている YouTube の動画を埋め込む形を採用した点である。これにより，ページを表示する際のデータ負荷を軽減するとともに，YouTube の字幕機能を利用して英語などの言語でのコンテンツ視聴を可能とした。

第３に，コンテンツの拡張性を担保することである。そのために，年度ごとに追加されるコンテンツをひとまとまりとし，チャプターを分けて随時追加することができるようにした。2022 年度制作のコンテンツは，第２チャプターに追加される予定である。

（大坂　遊*）

Ⅵ　おわりに－今後の展開可能性－

アーカイブ構想は緒に就いたばかりである，課題は山積するが，今後の展開の可能性として，以下の３点を想定している。

第１に当事者間の対話である。

現時点では，幸いにして，アーカイブを企画した者，アーカイブされた者，アーカイブを編集した者，の三者がともに完成した作品について対話できる状況にある。EVRI（2021）では当事者が集い，アーカイブ化の意義と限界を話し合うセミナーを設けることができた。今後は，企画者は，どのような意図をもって対象者を選定し，どのような意図をもって質問したのか。証言者は，なぜその場で敢えてその経験を発話し，その資料を提供したのか。編集者は，何を意図してどの場面をカットし，どのようにナラティブを再構成したのか。関係者の困難や葛藤を含めて記録に留めていく必要があるだろう。

第２に研究・教育への活用である。

今後，一定数の平和教育者の語りをアーカイブしていくと，多様な立場，経験に裏打ちされた歴史が浮かび上がってくる可能性がある。中には，オフィシャルな教育史資料には残りにくい「困難な歴史」も語られてくるだろう。しかし，それをいかに使うかは現時点では未知数である。Ⅰでも一部言及したが，将来的には，教員養成の一環として，また教養教育の一環として，学生を平和教育者への聞き取りや動画編集に参画させ，ヒロシマの平和教育者の実践を歴史に残す意義と方法を考えさせたい。記憶を継承し再構築する責任を学生と共有することで，広島の戦後（平和）教育史に向きあう主体（としての教師，市民）を育成したい。

第３に国際的文脈への拡張である。

ヒロシマ以外の世界の諸地域には，そこの文脈に即した平和教育者が存在する。例えば，アフガニスタンやミャンマー，シリア，ルワンダ等の紛争地には，文字通りの平和教育者が存在するだろう。紛争地に限らずとも，ジェノサイドを教えるために，学校空間を安心・安全な場とするために，そして子どもの人権を保障するために，それぞれの地で平和構築にたずさわっている「平和教育者」が存在する。上の２を実行し，ヒロシマの平和教育者の経験を相対化していこうとすると，平和教育（者）の活動を捉えるコンテクストの拡大は避けられない。長期計画となるだろうが，そうして得られたアーカイブの研究・教育上の価値は，より一層高まるに違いない。

なお，本アーカイブの作成に当たっては，EVRI のスタッフに献身的なご支援をいただいた。また，以下の皆様には，動画作成で多大なご協力をいただいた。ここに記して深謝いたします。

野瀬　輝（広島大学大学院人間社会科学研究科・博士課程前期）
大岡慎治（広島大学教育学部・学部３年）
佐藤莉沙（広島大学教育学部・学部３年）
山下　光（広島大学教育学部・学部３年）
（草原和博*・小山正孝・川口広美・金鍾成・川口隆行・間瀬茂夫・岩田昌太郎・丸山恭司・吉田成章・桑山尚司）

引用文献

草原和博・木下博義・松宮奈賀子・川合紀宗・三好美織・小山正孝・影山和也・棚橋健治・川口広美・金鍾成・山元隆春・間瀬茂夫・永田良太・岩田昌太郎・井戸川豊・丸山恭司・吉田成章・森田愛子・桑山尚司・佐藤万知（2020）「INEI 加盟大学と連携した授業研究・平和教育セミナー（１）:「PELSTE2020」の成果報告」広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書，第 18 巻，pp.39-47。

草原和博・松宮奈賀子・三好美織・小山正孝・川口広美・金鍾成・岩田昌太郎・丸山恭司・吉田成章・桑山尚司（2021）「INEI 加盟大学と連携した授業研究・平和教育セミナー（２）:「PELSTE2021」の実施計画」広島大学教育学部共同研究プロジェクト報告書，第 19 巻，pp.25-32。

広島大学教育ヴィジョン研究センター（EVRI）（2021）「第 78 回定例オンラインセミナー「これからの平和教育を考える（１）－平和教育者アーカイブ構築の意義と可能性－」を開催しました」https://evri.hiroshima-u.ac.jp/17878（2022 年 2 月 10 日閲覧）